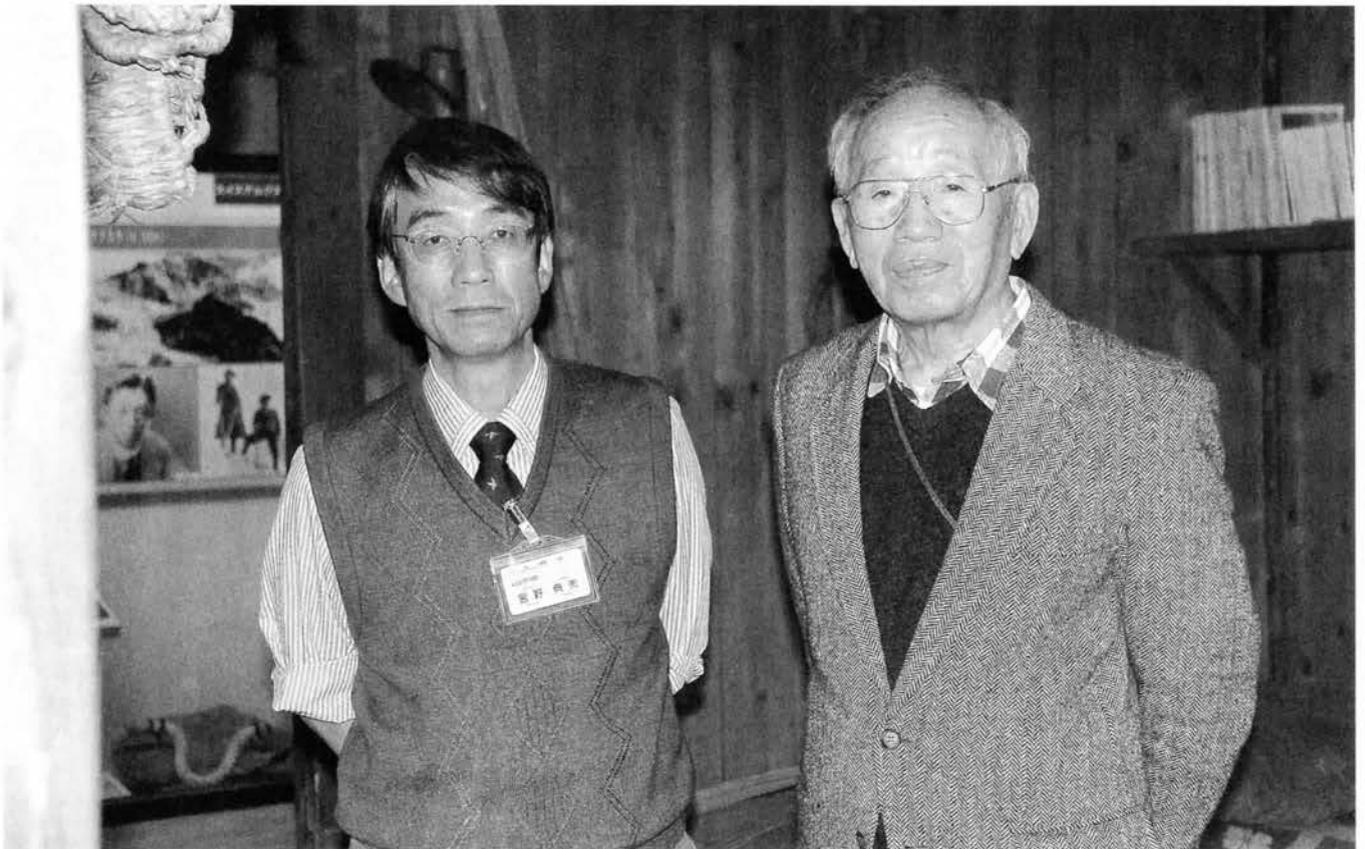


山と博物館

第55巻 第6号 2010年6月25日

市立大町山岳博物館



ピッケルの寄贈で博物館を訪れた二村善市氏（右）、左は4月より着任した宮野典夫・山岳博物館館長

ふたむらざんいち 二村善市氏製作のピッケル

清水 隆寿

平成21年11月末、黒田順麗氏（神奈川県藤沢市）、二村善市氏（愛知県豊田市）の連名により、二村氏製作のピッケルなど合せて11本を山岳博物館へご寄贈頂きました。

初めて日本にピッケルが西欧からもたらされたのが明治末期、その後昭和初期になるとピッケルは国産化されるようになりました。山内東一郎氏（1890—1966）、門田直馬氏（1877—1954）、森谷一郎氏（1903—1980）など国内を代表するピッケル製作者の伝統と技を有形無形に継承し、さらなる技術改良を加えた二村氏は、現在日本で唯一といわれる鍛造手作りによるウッドシャフト（木製柄）のピッケルを製作する鍛冶職人として知られ、日本を代表するピッケル製作者として活躍されています。

二村氏のこれまで歩まれた道について本文P2以降にその概要を掲載して頂きました。またご自身のホームページにも「野鍛冶一代」として公開されており、さらには黒田順麗氏の父、圭助氏により「山の世界の同田貫——二村ピッケルの誕生——」と題して、『山と博物館』第41巻6号に二村ピッケル誕生秘話が記載されております。ご関心のある方はそちらも合せてご覧頂ければと存じます。

前述の日本を代表するピッケル製作者が生涯に製作したピッケルの本数は、いずれも詳細は不明ですが、山内氏が1800本程度、門田氏三代で5万本程度、森谷氏二代で約3000本弱、そして二村氏が現在までに約2600本といわれています。長年にわたり多くの登山者に愛されたその品質の証しと信頼は、これらの製作本数によって裏打ちされていると理解できるのではないかと思います。

ピッケルの誕生は多くの偶然が重なることから始まった。

二村 善市

先ず、呉服店のショー・ウィンドー等を作っていた指物大工の家に次男坊として生まれた私が、戦争のお陰で偶然「かじや」になり、終戦直後の衣・食・住 何も無い時にスキーを始めた事でした。

1931年3月31日生まれの現在79歳ですが、小学1年生のときの写真を見ると利口そうな5歳上の兄の横になんとも締まりの無い私が写っています。それもその筈、4月以降に生まれたものを早く職人の世界に入れようと有難い親心から3月末にして出生届を出したそうです。

1944年 戦時中の学徒動員で軍需用のトラックを作っていたトヨタ自動車の工場に駆り出され、働かされていた所が第4機械の中にあった金属を削る刃物(いわゆるバイト)を作る処でした。今まで指物屋の鉋屑の中で過ごしてきた私が、ここで初めて鉄に出会い終戦の直前まで「かじや」の先手として働いていました。

1945年3月国民学校高等科を卒業と同時に、かねて志願していた大津市の陸軍



小学校1年生

少年兵学校に合格し、戦場の大空に羽ばたく操縦士を夢見て入校、直ちに特攻志願の血判に押印し兵学校を卒業すると



少年飛行兵

同時に戦場に赴くはずでしたが8月15日に終戦を迎え22日に復員しました。国

中が大混乱の中、私も時の流れに翻弄され夢破れて親元に帰りました。其の後半年間をぶらぶら休養していましたが、1946年初めより刀匠藤原武則氏のもとに弟子入りしました。これには訳が在りまして、私の父方の伯母が武則氏の許に嫁いでおり、その伯母から「かじや」になれば一生食いはぐれがないと勧められましたのと、学徒動員で先手の経験もあり弟子入りしました。

しかし、1年後に師匠が肋膜炎になり一家6人中4人まで病気になる、仕事も教えて貰えないのに一家を支えなければならず凶凶波乱万丈とまでは言えませんが色々な事がありました。しかし、この4年間の修行中に私のこれからの人生において生きて行く為の様々な要素を学ぶことが出来ました。「試行錯誤」「独学」「独創的なものを作る事」等々。

1950年まだ師匠が病の中でしたが、私の下に小僧が入ったのと実家の母親が45歳で病死したのを機会に、独立する為の僅かな道具(ハシ丁と巣床にハンマー1本と立てバイス1台)それに「善則」の銘を頂き、師匠の元を離れました。それから実家から米2俵を貰い其の米を売った金で豊橋市の工具店

から金床と「ふいご」を買い、開業する事が出来る最低限の準備をしたのでした。スキーとの出会い

1951年仕事の合間に好きなことが出来る様になり、同級生で町内でも有名な素封家であった医者の子が長野県のスキー場へ連れて行ってくれたのが生まれて初めてのスキーでした。翌年に



中日スキー学校に入り、最初の夜同じ宿に泊まった学校生たちと自己紹介したときに、たまたま同じ町内の人が二人いました。故郷から350キロ以上も離れたスキー場で偶然とは言えよく一緒になれたものでした。私より2級ほど下の内藤氏と木戸氏で、この出会いがその後の私の人生を大きく変える事になりました。

ピッケル

1952年初夏、私の仕事場に内藤君が尋ねてきました。「これは登山で使うピッケルという物だがこれを見本に作ってくれないか」と言われました。この時がピッケルとの最初の出会いでしたが、その後は全く注文も無く忘れるとも無く忘れていました。

1955年、戦後日本で初めて作られた農耕用耕運機(ティラー)が日技研工業から売り出されました。これは牛や馬を動力にして来た従来の農業が、エンジンを動力にした初めての農業機械でした。この先10年20年の内に農家は必ず機械化されて今までの様に手で使う農具は使わなくなると危機感を抱き、何かいい仕事がないかと考えていました。

1959年ふと読んだ山岳雑誌「山と溪谷」10月号に鎌倉市在住の黒田圭助氏の随筆「ピッケルのカルテ」で、ピッケル創成期から現在に至るまでの古今東西のピッケルのイラストやメーカーのロゴマークからピッケルの鍛造工程までイラストで載っていました。私が五里霧中で作ったピッケルの全貌が初めて解ったのでした。

また末尾には「日本には日本刀と言う世界の誇れる技術があるのだからこれを応用したピッケルが出来ないだろうか」と締め括っていました。これは鍛冶を職業としている私にとって激を投げかけられたようで熱い思いを感じました。

この記事と前後して北海道から出版された「岩と雪」の中に当時世界一と評されていた仙台の山内東一郎氏と日本山岳会の平林一郎氏の対談が載っていて、山内氏には家業を継ぐ人が無く一代限りで終わる事と、「この仕事は馬鹿にならないと出来ないがその内にピッケルを作てやろうと言う人がでてくるから心配ない」とありました。この二つの文章は私に大きな影響を与えました。日本では登山人口こそ少ないが、製作する人は個人を含めても3、4社、世界中でも十数社しかないと言う事で良い物を作れば山内氏のように私も世界一に成れるのではないかと思いました。

1960年本格的に試作を始めましたが失敗品で山が出来る程になり考えました。前述のピッケルのカルテの著者黒田氏に手紙を送りました所、早速私の所へこれら色々ピッケルに関するお話を聞かせて頂きました。翌日黒田氏の見ている前で、氏が長年温められていた構想の下で新しいタイプのピッケルを鍛造してお見せしました。



内藤氏に作ったピッケル

これで試作に大きな柱が出来ましたので今度は試作したこれらのピッケルを試験的に使ってくれる人を探することにしました。最初に黒田氏が目をつけたのは当時国内で一番低温になる処、即ち富士山頂でした。これは当時気象庁の職員で著名な作家新田次郎氏に話を持って行き、この極寒のフィールドでテストをして貰えないかと打診した所、これは国費でテストをするようなものだと言われ断られた様でした。

黒田氏は山の友人で当時川崎市に登山用品店を経営し山岳会（登山用具研究会）を組織していたU氏にこの話をし、テストを一任し使用レポートを送って頂くようにしました。

このルートを試作して4本と5本の試作作品をテストして貰いましたが、送って頂いたレポートは散々なものでした。曰くバランスが悪いと一様に言われました。が、この問題は偶然にも意外な事から解決しました。

機械作り

1962年初夏、本職の火造り仕事で日本発条KKのシート生産ラインで使う「ばし」（シートの骨組みを作るためのやつ）とこ様手（工具）を作っていました。この年トヨタ自動車は新型車カローラを作るにあたってシート仕様を全く変えました。

今までの仕様はベッドと同じ様に作られていましたが、これを根本的に替えスプリングを水平蛇行形にしてウレタンフォームに鑄込

むという新しい形になりました。之に使用する新しい全自動クリップ・マシンは、バスロード型といって3本爪でつかみ締める機械でアメリカ製の機械とクリップを全量輸入しなければならず、会社としては自社製の機械とクリップで賄いたく試作していました。そんな中たまたま納品に行った時、補修部の中に社内で作ったバスロード型の試作品を置き大勢で話をしていました。人一倍好奇心の強い私は工員の皆さんと一緒に機械を検討していたところその場に居合わせた工場長が私にこの機械を試作してくれないかと言われました。

工作機械も何も無い鍛冶屋がとんでもない事を引き受けてしまったと思いましたが、3週間位かけて手動で動く機械を作り上げて工場長に見せたところ大変気に入って今度は全自動で動く機械を作ってくれと、また工作機械は全て使って良いといわれました。夏の暑い盛りまでの3ヶ月間寝食を忘れてクリップ・マシン製作に没頭しました。秋になって全自動の機械は完成してラインに配置されましたが、エアの圧力が足りず出来上がったものの増し締めが必要になり、止むを得ず足動に切り替えた事でクリップは完全に締め、秋に発売予定の新型カローラの完成に間に合いました。

後日工場長が料亭に招待してくれ、お酒が入ってから「二村君これからも細く長く付き合ってくれないか」と、色々話しをしている内に、私がピッケルを作っており「材質とか、熱処理、鍛造、機械的性質など、分析に関する事で非常に困っております」と話しますと、工場長は自分と同期の人が大同製鋼中央研究所で所長をしているから紹介しようと言って一筆書いてくれました。要求したお金を出さ

なかつたお詫びの意味があつたと思いますが、私としては誠に好都合で日本を代表する特殊鋼メーカーの中央研究所に個人がフリーパスで出入り出来るようになり、私の作ったピッケルや外国製のピッケルの分析などお願いしました。

またバランスに付いてもフランス製の現時点で一番よい評価を得ているシャルレ・モンブラン・ガイドを黒田氏から提供してもらい解体して調べた所、黄金率のような物があることが判りました。

アメリカン・ヒッコリー

金属は解決しましたが次はシャフトでした。縦走中にハーネスの上でよく折れると言う事故がありました。之はスピツェの構造と木の強度とのバランスの問題で、私の場合ヒッコリーを使うことにし、スピツェの構造も足の長さ6センチの所を約3倍の17・5センチの長さにしてハーネスの上で起こる破損がおきないように改良しました。

しかし硬いヒッコリーの内部に細いテーパーになった穴を開けるのは大変な事でした。そこで先端の3ミリまで一度に加工せず、登山で使われている極地法を応用して6ミリから4・5ミリそして最後は3ミリとあげ、最後に特注で作ったテーパー・ドリルで段差をなくするという方法でこの問題を克服しました。

ヒッコリーは国内の木材店の何処を探しても見つかりませんでした。此処で私のスキーでの知識が役に立ちました。即ちヒッコリーを使ったスキー板がありましたのでスキーメーカーへ行けばかならず有ると思いましたが、何処のスポーツ用品店を訪ねても教えてくれませんでした。

それではと一計を案じ、その夜長野野行きの夜行列車に乗りア・ポイントもとらずに野沢温泉の片桐先生を訪ねました。手元にはセピア色になったスキー教室の記念写真を持っていました。早朝にもかかわらず先生は快く、長野県から新潟県に本社のあるスキーメーカーへの紹介状を5・6枚ご自分の名刺の裏に書き込んで頂きました。この名刺を許に午後飯山市内で2社目になるスワロー・スキーさんでヒッコリー材を小分けして頂きました。

しかしピッケルばかりに熱中して、本業の農具の修理や亜炭鋏で採炭に使用する鶴嘴などを修理にこられたお客に、また家では家内にも長女が生まれて家計が苦しいのにと苦情を言われどうでした。

ご存知かも知れませんが鍛冶作業は通常横座（親方）と先手（小僧）の二人で行いますが、私は全て一人で行う関係上ピッケルの櫃穴（之はシャフトの先端が入る穴）を開ける時90度で熱した金属を左手のはしで持ち右手でハンマーを持つと櫃穴を開ける為の目打ち金を持つ為の手がありません、つまり第3の手がいるのです。真つ赤な金属が人の手を借りずに自立することが必要になってくるのです。勿論鍛冶屋の治具は何処に行っても売っていません。必要があれば自分で考えて作らなければなりません。この時考えたのは大きな金属のブロックに溝を彫りそこへ差し込むと言う単純な構造でしたが、これを実際に使用して2・3回改良したところ、上手く行き以後全ての櫃穴作業に使用しています。何しろ他の工場を見に行くのではなく総て独学で行うため試行錯誤が必要になります。

1963年漸く準備が整い発売のする事になり、最初の5本はお世話になった人にお礼

の意味をこめて贈呈しました。販売価格の決定は黒田氏と話し合った結果、お金を取るか名前を取るかと言う事になり、当時地方公務員の初任給が5,000円から6,000円の時代に1万円以上は高過ぎると言うことで9,000円に決まりました。

この年の秋になると世界初のエベレスト登頂者の一人テンジン・ノルゲイ氏の来日が予定されたので、黒田氏から日本山岳会を通じて2本のピッケルを贈呈するように進言され急遽製作して東京に送りました。このピッケルは日本山岳会の歓迎パーティーの会場でテンジン・ノルゲイ氏手渡されましたが、その後ダージリンの国立登山学校に飾られたようです。

山内氏を訪ねて

1965年の晩秋、私は鎌倉の黒田氏の車に同乗してピッケル作りの原点を求めて北に向かいました。行く先は仙台山の山内東一郎氏宅。夜の4号線をひた走り、早朝まだ暗い内に仙台につきました。

当時氏は国鉄職員であった次男の家に居られて、鍛冶場も敷地内にありました。早朝に着いた私共を氏は機嫌良く迎え入れ下さり、色々ピッケルに関するお話をさせて頂きました。驚いた事に氏は70才を過ぎてからもピッケルのスピツェに改良を加えておられ、私が今まで他のメーカーの欠点であったハーネスのすぐ上で起きるシャフトの破損がスピツェの足の長さに有ると見ていたのを氏は既に看破しておられ、ドリルを使わずに手作業で180ミリの足の長さを確保し、より良い品質を目指しておられました。

工場には電気で動く機械が1台も無く手回しのボール盤が1台柱に取り付けて有り、ほ

かには仕上げ用の鍍金が有るだけでした。世界一といわれたピッケルが、この鍛冶場から生まれたとは考えられませんでした。機械ではなく人が作るものであるという点で納得できました。

この仙台行きの目標は元々技術的なものではなく、私がピッケルを作る基になった精神的な面を求めての旅でしたので、この成果は今日まで続いた私のピッケル作りの基層と成ったのでした。

翌、1966年4月4日の新聞に山内氏の訃報が載りました。もし、あの時お会いできなかったら一生悔いが残っただろうと思いい運命の様なものを感じたのでした。

長谷川モデル

1978年私のピッケルに転機が訪れました。新しくダブル・アックスと言う登山技術がヨーロッパから入ってきて、今まで私が作ってきたピッケルではこの技術には全く役に立たなくなりました。

このピッケルのオーダーが最初に入ったのは1978年初めでした。単独登攀者のK氏が私の所に来て、ヨーロッパアルプスの著名な山に登るために作ってほしいとの事でした。ダブル・アックスの様なピッケルはまだ一度も作ったことが無かったのでイメージ・スケッチから試作を開始、製作途中の作品を東京までもって行きK氏と打ち合わせをするべく連絡していた処へ、今度はヨーロッパ2大北壁の単独登攀に成功した長谷川恒夫氏から電話がありダブル・アックス用ピッケルを作つて貰えるか



長谷川氏の結婚式に招かれて

と問い合わせしてきました。私が明日上京しますと言うと図面も書いてあるので是非見てほしいと言われました。お会いして設計図を見ましたが本格的に書かれた物で長谷川氏の意図が十分読み取れましたのでその場で製作することを約束しました。

早速試作を開始しましたがノーマルシリーズのピッケルとは違い(氷を砕くのではなく、破碎する事なく突き刺さって抜けない事が要求される)鍛造するのが非常に難しく、ピッケルの出来上がり精度が通常の厚さの3分の1でこの厚さでは曲がるか折れてしまうと伝えらると、長谷川氏は最後の北壁ランドジョラスの氷はこの厚さで無いと入らないとの事で、つまり極限の世界では極限の道具で無ければ為らないという事でした。

標高差1200メートルの大岸壁の中ではピッケルの破損は命にかかります。少し位の曲がりはいいのですが欠けたり折れたりしては大変です。私が使っている(SNCM9種)と言う鋼は、対低温脆性に強くこの心配は無いのですが、安全度を多くとり鍛造に注意を払い熱処理に気を使って製作しました。

このピッケルを使い長谷川氏は1979年2月25日ランドジョラスの登攀を開始、3月4日ウオーカー・ピークに達し、3年連続でヨーロッパアルプス3大北壁の世界初冬季・単独登攀達成の偉業を成し遂げられました。帰国後使用した3種類のピッケル・バイエル・ハンマーの内ピッケルの損傷が一番酷く、相当の登山家が一生使ってもこの様な状態にはならないと思いましたが、その後報告会で登攀のお話を聞いたところ良く解りました。ルートの中では氷の薄い所で力一杯振り下ろすと火花がとび硝煙の匂いがしたそうです。

正に岸壁を切っていたのです。

余談ですが使用した3本(ピッケル・バイエル・ハンマー)は、劇場公開型記録映画「北壁に舞う」を制作した博報堂さんのご好意で松本市の山と自然博物館に寄贈されて展示してあります。(長谷川氏は1991年、カシミールのウルタルII峰で下山途中に雪崩に巻き込まれ死亡されました。)

この様にして私の作ったピッケルがこの大きな計画を成功に導いたのでした。

1991年60歳になったのを期に次男鉄夫に家業を譲り、屋号も「二村鍛冶」から「二村クラフト」と変更し私は手当てをもらって気ままに仕事をするという形になりました。あながき

私が今までに為し得たこの仕事も結局人と人との関わり合い、そして人の和だったと思います。

私がか手掛けてきた物作りの世界では偶然巡ってきたチャンスを見逃さず、その都度まじめに真つ向から対処したことがよい結果をもたらしたと思っています。

(愛知県豊田市平芝町4-36-15)

【本文の字句訂正】

『山と博物館』第55巻第5号のP4第1段本文7行目の「柳沢峠」は「白沢洞門」の間違いでした。訂正してお詫び申し上げます。

山と博物館 第55巻 第6号

発行 2010年6月25日発行
長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六二二二二〇一一
FAX 〇二六二二二二二二二

E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpk/

印刷 大系タイムス株式会社

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む) 一切手不可
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七二二九九三